日本医史学雑誌第三十四巻第三号
昭和六十三年七月三十日発行

医史学と私

大鳥蘭三郎

『日本医史学雑誌』の編集委員の方から表題について書くように頼まれ、私は実は少々当惑した。というのは私は昭和五十四年の第八〇回日本医史学総会の特別講演としてこれとまったく同じ演題でしゃべり、あまり出来がよくないものを『日本医史学雑誌』(第二十五巻第二号、昭和五十四年三月)に発表しているからである。

しかしその半面、出来が悪いものならそれを一層よいものにしたらということも考えられる。そこで私は先に発表した論文よりも一段と充実した内容をもったものに改めたらどうかということを考えた。それで私はこの方向にそって、なるべく前の論文との重複を避けて書いてみることにした。果して私の意図するところが実現するかどうかは保証の限りではないが。

私と医史学との関係を論ずるとなれば、どうしても避けて通ることが出来ない点が二つある。一つは恩師藤浪剛一先生とのかかわり合いであり、他の一つはオランダ、あるいはオランダ語との関係である。これら二つの点は前にも記したと思うが、今度は少し観点を変えて考えてみることにした。

藤浪先生との関係は非常に深く、かつ複雑なものであった。私は昭和七年三月に慶応義塾大学医学部を卒業したが、それにはかなり困難な事情があったようである。と言うのは私は学術の方もあまり優れていたとは言えなかったが、どうやら曲りなりにも卒業することが出来た。いわゆる、まあまあ卒業である。問題となったのは私の健康上の事である。これは今でもあまり変りはないが、私の体力的な能力が将来医学の研究に耐えられるかどうかということであったらしい。事

実私には、臨床上の事もまた研究面の事も、やりとげるという点ではおおいに疑問があったからである。

それで一応卒業は出来たものの、臨床へもまた基礎へも就くことが出来ず、どうしたものかとおおいに迷った。その時に藤浪先生から「僕の所へ来て古医書を読みなさい」という、私にとってはまことにありがたい申し出であったので、私は一も二もなく理学的診療科（現在の放射線医学教室の前身）の一員となることとなった。けれども同教室員らしい仕事はほとんどせず、ただ同教室の外来患者の名簿に病名を記入するだけであった。その余りの時間に当時の同教室の図書室に入って医学史に関する諸著述を読むことが、私に課せられた仕事であった。そのはじめのうちは日本医学史についての知識を養うために、富士川游先生の『日本医学史』を二、三回通読した。

『日本医学史』は菊版一〇〇〇頁にも及ぼうとする大著で、全文文語体で書いてある。したがってそれを読みこなすことはなかなか容易なことではなかった。

かようにして日本医学の発展の道筋をおぼろげながら会得することが出来、私の医学史研究の毎日が続くことになった。その後私もいよいよ論文を書くことになり、「我が国医学に使用せらるる解剖学語彙の研究」と題する一文を記し、これを日本医史学会の機関誌『中外医事新報』一一九〇～九三号、昭和七年から八年にわたって発表した。これはいわゆる私の処女作というべきものであった。

この論文を書いた時には次のようなエピソードがある。私は論文の一節を記す度ごとにこれを先生に提出した。先生はさっそく私を呼びつけ私と向い合って論文を見て下さったが、私の論文は無惨にも先生の手により余す所なく赤鉛筆で消されていった。私は口語体で記したが、先生は独特の文語体で私の論文を訂正、加筆されたのである。

その後日本医史学会の機関誌『中外医事新報』に時々論文を発表した。入局してどのくらい後の事であったか、またどういうきっかけでそうなったかははっきりと覚えていないが、毎日小石川区駕籠町にある東洋文庫へ通い、中国に伝わった西洋医学の実情についての研究を行ないはじめた。同文庫に所蔵されている多くの雑誌類について次から次へと調べ上

げ、その結果を『中外』誌上に発表した。「近世シナにおける西洋医師の活躍期」、「シナにおけるジェンナー種痘」等の論文はいずれもこの時の所産である。

その後、間もなくドイツからいわゆるシーボルト文献が招来されることになった。これは日独間の交渉がとくに密接になってきた昭和九年当時、ベルリンにある日本学会 Japan Institute に蔵されているシーボルト文献約三〇〇点が一年限りで日本へ貸与されることとなり、日独文化協会が仲介して同文献資料を調査研究するための委員会が作られ、それらの文献資料が東京大学の図書館内の一室に置かれることとなった。

とりあえず三〇〇余点の資料を残らずフォトシュタットで複写することとなり、その作業を行なうために三人の研究員がおかれ、私もその一員に加えられた。私の他にはいずれも東京大学文学部出身の大久保利謙、箭内健次の両氏で同文献資料の管理に当った。当時私は毎日午前九時過ぎに牛込にあった家を出て、市電に乗り東大図書館へ通い、同文献を二、三点ずつ地下室の写真室へ持って行き、午後に写真撮影が終って文献資料を収蔵、保管することを日課とした。

このような作業が約一年で終り、ドイツへそれらの文献を返す前に、それらのものと日本に現存するシーボルト関係資料を加え、昭和十年四月二十日から二十九日まで上野の東京科学博物館で展示会を開き一般に公開した。その時の記録として『シーボルト文献資料展覧会目録』が編集され、比較的詳しい説明が各展示品について試みられた。これについては私もおおいに努力した。

昭和十三年、『シーボルト研究』と題する本が岩波書店より刊行され、シーボルトについて各方面の専門学者が貴重な研究を発表されている。私はこれらの多くの論文のうち、医学に関係あるものについての研究を発表した。それらの中でも特異なことは、緒方富雄先生が中心となって、シーボルトへ提出した日本人門弟の蘭語論文の研究を数人が手分けして行なったことである。これによってシーボルト自身の日本研究の道程がかなり明らかにされた。この時から私とシーボルトとの関係が始まり、今に及んでいる。

私とオランダ、あるいはオランダ語とのかかわりあいはこうである。私は明治四十一年（一九〇八）三月三日、オランダのハーグで生まれた。その当時私の父はオランダの日本公使館の書記官を勤めていた。私の名前の蘭三郎はすなわちここに由来している。その当時、日本公使館の官邸はハーグのウィルヘルミナーストラート八番地にあった。先年オランダへ行った折に前記の場所を訪ねたが、そこには新しい住宅が建てられていた。聞けばこの場所は第二次世界大戦で爆撃を受けまったく原状を失ない、私が見た建物はその後になって建てられたものだという。私はここに立ってしばらくは一種特別な感情に浸った。私はここに生後約一年半いて、両親、姉兄等とともに日本へ帰った。それ故オランダ語はまったく知らなかった。

私がオランダ語の勉強を始めたのは大学を卒業してからであった。それもあまり深く考えたからではなく、ただ何とはなしに私にとっていわば第二の母国語であるオランダ語を勉強しようと思い立ったのもあながち無理なことではなかった。

昭和七年六月のある日私は日本橋の丸善本店へ出かけ、オランダ語を独習するために何かよい本はないかとあちこち探した。その結果探し当てたものは、T.G.G. Valette 編著の Dutch Conversation Grammar である。同書は近代語学の勉学のための Gaspey-Otto, Sauer 方式によるもので四部より成り、第一部は発音、第二部は例題毎にオランダ語の文法を簡単に説明し、第三部はさらにその応用例を数多く掲げ、第四部は名詞、形容詞、動詞の順にオランダ語の編成を論じている。

同書の巻末頁を見ると、16, Jun. 1932 Ra. Otori と記されているが、これは一九三二年、すなわち昭和七年六月十六日に私がこの本を手に入れた時日を示している。

私は元来語学はきらいではなく、この本によりオランダ語を独学で何とかこなすことが出来るようになった。しかしその発音の方はまったく自信がなく、ただオランダ語がドイツ語とよく似ているところからどうやらオランダ文を読むこと

が出来た。ついでに言わせてもらえば、当時の予科（今の進学課程）における語学の時間数はすこぶる多く、ドイツ語は週に十二、三時間、英語も週七、八時間は下らなかった。この時の語学の勉強が私のオランダ語の独習に大いに役立ったことはいうまでもない。

こうして何とかオランダ語を読むことが出来るようになった私は、その後日本学士院に所蔵されているオランダ語で書かれた『蘭館日誌』を読むことに力を注ぎ、その中に記されている医学関係事項を一、一書き抜いた。まだゼロックスなどというものがなかったので、私はそれを一々丹念に筆写した。それについての思い出は、その当時家にあったおそらく父が持っていたと思われる細い罫が引かれている紙に、今から考えるとよくもまあこんなに細い字で書き抜いたものと、自分がしたことながら深く感銘している。これが後年、私が野口記念賞を受けた研究の一資料になったことを思えば一層感慨深い。

第二次世界大戦の勃発、戦中、戦後の混乱などについても私なりの思い出が数多くあるのは当然であるが、今はこれに触れないことにする。『蘭館日誌』の研究はその後も引き続いて行ない、その結果をポツポツ『日本医史学雑誌』へ発表した。昭和二十九年七月発行の同雑誌第五巻第二号には「近世医学史上における『蘭館日誌』」と題する一文を発表し、昭和三十三年四月にはその年に行なわれた日本医史学会総会で特別講演として「日蘭医学交流史―十七世紀における日蘭医学の交流」を公表した。さらに言えば昭和三十四年五月発行の『日本医史学雑誌』第十巻第一号には、「蘭館日誌の医史学的研究」をまとめて発表し、また同誌の第三巻第四号には「蘭館日誌中のシーボルト関係記事」という一文を公表した。

前述のような次第で、私の医史学に関する研究は悉くと言ってもよいほど日本医学と外国医学との交渉について終始し、ことに互いの国の書物によって両者の関係がどのように変わったかを追求している。

終りに当り、ふと思いついたことがある。すこし順が狂うが、私と小川鼎三先生との因縁について附記しておきたい。

小川先生は先年惜しまれつつなくなられたが、昭和四十七年に東北大学医学部で行われた第七三回日本医史学会総会で

「医史学と私」と題する特別講演を試みられた。

そのなかで、先生は京都大学病理学教授藤浪鑑博士の講演を聴き、医史学への関心を強くされたという。藤浪鑑博士はすぐれた病理学者であるとともに医史学についても定見を持ち、その方面の著作、論文も多かった。

私が師事した藤浪剛一先生はこの鑑博士の令弟であり、鑑博士の影響を大きく受けたに違いないと思われる。こう考えると私と小川鼎三先生とは間接的に医史学の上で結ばれているといえる。これは少々こじつけた言いかたであるが、奇縁というべきであろうか。

（日本医史学会理事長）